

あめ女

愛知県立豊野高校 2年 小崎 結菜

五年生の二学期に転校してきたユリちゃんは、私と同じ毎週金曜日にそろばん教室に通っている。

今日もユリちゃんは、私よりも早く終わっているのに、私が問題を解き終わるまで待とうとしている。

「今日は時間かかりそうだから、先帰っていいよ。」

私は、問題の書いてあるプリントに目を落としながら言う。

「いいよ、大丈夫。待つてるから。」

何が大丈夫なのだろうか。と思いつながら、ユリちゃんのほうを見ると、学校の宿題を家庭科の授業で作った花柄のナップサックから取り出していた。きつと、今日も私の方が終わるのが遅くなるのだろうかと思つて持つてきていたのだろうか。

机の上に置かれたユリちゃんの筆箱は、私の使っているものよりもサイズが小さくて、デザインもシンプルだ。小学五年生が使うには大人っぽい。だから「筆箱」というよりも「ペンケース」という響きが合っているのかもしれない。

ふと窓の外に目をやると、予報通りの雨が植木を強く打ちつけていた。そして、窓ガラスにしがみついている雨粒たちが、引き寄せ合いながらゆっくりと小さな窓ガラスの表面を、撫でるように伝つていった。

ガラガラと扉を開けると、さっきよりも雨が小降りになっていた。丸い壺のような傘立てから、持ち手が小豆色の傘を勢いよく引き抜く。

ユリちゃんは、初めて一緒に帰った日から、そろばん教室を出て扉を閉めると、毎回イチゴ味の飴をくれる。小ぶりなこの飴が、私の口の中からいなくなるのは、そろばん教室を出てから私の家に着くまでの時間とほとんど同じだ。そのことに気づいたとき、私は少し気味が悪いと思つた。

「はい、どうぞ。」

いつも通り私の手のひらに飴をのせる。

「この飴どこに売ってるの？」

「私の家の近くの駄菓子屋さんだよー。ほら、まりなちゃんのおばあちゃんがやってるよ。」
ユリちゃんは、自分が食べる用の飴をポケットから取り出しながら答える。

まりなちゃんは私達と同じクラスで、ユリちゃんの前の席の子だ。私もその駄菓子屋には、何度か行ったことがあった。

ユリちゃんは毎週飴をくれるので、申し訳なくなつてお母さんが買つてくれていた、チョコと

クッキーが一緒になつているお菓子をあげたことある。その頃は、単純に飴を貰うことが私にとつて嬉しいことだった。けれど段々と、貰つたら何かお返しをしなくてはと思うようになり、最近は煩わしく思うようになってきた。

そろばん教室の屋根は小さく、小降りになってきたといえども足元が濡れてしまうので、ユリちゃんの桃色の運動靴は蛍光ペンのピンク色のようになった。

私は、なぜだか食べる気が起きなくて、右側にいるユリちゃんに見えないように、左側の上着のポケットに押し込んだ。

翌週の金曜日、ユリちゃんはそろばん教室に来なかった。

月曜日、学校に登校して教室に入ると、まりなちゃんを取り巻きの女子二人を連れて、私のもとに来た。

「ユリちゃん、ばあちゃんのお店で万引きしたんだって。」

「えっ」

私の反応も見ずに、話を続ける。

「先週の金曜日に飴を二個ポケットに入れようとしてるところを、ばあちゃんが見たらしいの。」

まりなちゃんは、深刻そうな顔を上手に貼りつけているけれど、嬉しそうだ。

「ばあちゃんが問い詰めたらしいんだけど、その日が初めてじゃなくて、毎週金曜日に飴を盗むのが日課だったんだって。」

先にこの話を聞いていたらしい取り巻きの二人は「こわーい」などときゃっきゃしている。

チャイムが鳴ると、椅子取りゲームでもしているかのように、クラスメイトが自分達の席につく。

私は思った。二個のうちの一個は、多分私の物になっていた。毎週金曜日あの瞬間に。

ユリちゃんが盗んだ飴が私の胃の中に、甘い塊から甘い液体になって入っていたと思うと、どうしようもなく虚しくなった。それと同時に、私の身体に何の影響も与えていないと良いなと願いながら、ポケットの中を強く握りしめた。

夕日が住宅街の隙間に入り込んでいく。

いつもと同じ道を歩きながら、私はポケットに入れたままだったイチゴ味の飴を口の中に放り込む。飴の入っていた包装紙に描かれているイチゴのキャラクターが、今はなぜだか恐ろしい妖怪に見える。ゴミとなった包装紙を、家に持って帰ることがおぞましく思えて、道路の脇にある側溝の隙間に、無理矢理食べさせるようにねじ込んだ。

夜寝るまでの体力や気力はあるはずなのに、うまく前に進めない。今の私は、まだインクはあるのに出なくなってしまうたボールペンみたいだ。

ユリちゃんはなぜ万引きをしたのだろうか。考えても分からないことを、頭の中にグルグルと巡らせながら、ガシガシと噛み砕くと、塊はやがてガラスの破片のように鋭くなった。舌が切れてしまったのだろうか。甘さに紛れて少し血の味がした。